

## コミュニティと身近な緑

赤澤宏樹（兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 教授）

### 路地と下町の暮らし

私は、大阪市内に残る戦前長屋で生まれ育ちました。実家の前は狭い路地で、父親が仕事の支度をしたり、近所のお母さん達が井戸端会議をしたり、年末にはご近所で餅つきもしていました。路地園芸も盛んで、幼少期の私にとって、ここは緑に囲まれた公園でもありました。ろう石で道に線を書いてケンケンパをしたり、色んな遊びの思い出があります。遊んでいる友達も10歳くらいの年齢幅があり、年長さんが年少さんの面倒をみてくれました。おそらく母親は、どこかの公園に行くより、この路地で遊んでいる方が安心だったと思います（図1）。

色んな人が狭い空間を共有する路地では、お互いの配慮が濃くみられます。例えばニュータウンでは、幅が広い道路ほど街路樹など緑が多く大きくなりますが、下町では広めの道路でも邪魔になるため緑は少なく、狭い奥まった路地になるほど緑が多く大きくなります。自転車も通れない狭い路地の奥に、8mを越す高木が植わっていることもあります。狭い路地は、ご近所さんしか使わないことがわかっているため、その範囲で生活の邪魔にならない最大の緑化をします。もちろん、迷惑がかからないように落葉の掃除はきちんとしますし、邪魔な枝はすぐ切ります。空間の広さではなく、住民の生活にあわせて緑が植えられます。

### 阪神・淡路大震災とコミュニティを再生する緑

1997年1月17日、阪神・淡路大震災が起きました。当時、大学4年生だった私は、春休みには公園の避難地利用の調査を手伝ったりしながら、避難所や仮設住宅で孤独死の問題があることをニュースで聞いていました。被災地に下町も多く含まれていて、濃密なコミュニティで暮らしていた方々が、命の確保のためにバラバラに避難生活を送らざるを得ない状況でした。大学院に進学した私は、震災復興の手伝いを直接できないことに無力感を感じながら、密接なコミュニティの大切さを研究しようと、実家近くを含めた路地の研究をしました。車中心の機能的な（画一的な）まちではなく、路地のような多様な空間の大切さを示しました。

人と自然の博物館の研究者として働き出したのは、震災から3年目で、避難・復旧から復興に本格的に移り始めた頃です。仮設住宅から移り住むための、災害復興住宅が建ち始めていました。その1つの南芦屋浜災害復興公営住宅（以下、南芦屋浜）のまちづくりに、参加させていただくことになりました。南芦屋浜では、色んな仮設住宅から移り住む方々のために、早期のコミュニティづくりが工夫されていました。入居前から仮設住宅での「暮らしのワークショップ」を通じて、新たな暮らしの準備がされました。その中に、住棟の真ん中にあるだんだん畑で、みんなで緑を育てて仲良くなろうという試みがありました。だんだん畑以外の場所でも勝手花壇がみられるなど、緑を通したコミュニケーションが見られましたが、だんだん畑



図1 実家近くの路地

住民の配慮によって、狭いながらもきれいに管理されている。

の活動ではそれがはっきり加速しました。当初の区分貸し花壇から、「みんなが仲良くなるために」共同畑に変更となり、収穫を中心とした交流を重ねることで（図2）、新しいコミュニティが生まれました。これらの活動を、自分たちの意志で行い、ルールなども自分たちで決めるまちづくり的な方法も、だんだん畑の成功に寄与しました。

### コミュニティ・ランドスケープ

路地の緑と、南芦屋浜のだんだん畑の取り組みを比べて、「“共空間”を媒体としたコミュニティ・ランドスケープの形成」をテーマに博士論文を執筆しました。従来から景観（ランドスケープ）は、人の生活も含めた様々な環境が視覚的に現れたものとされてきましたが、中でも人の生活が色濃い景観を「コミュニティ・ランドスケープ」と定義しています。カッコよくてシュッとした景観ではないかもしれませんが、自分の場所と感じ、交流によって育まれ、安心や愛着を感じるコミュニティのための景観です（図3）。路地やだんだん畑に限らず、庭や道路、公園や街路樹など様々な場所でコミュニティ・ランドスケープをつくることができると思います。

### コミュニティと公園

身近な公園でも、コミュニティ・ランドスケープをつくる機会がありました。尼崎市にある西武庫公園は、1963年に開園した古い公園で、交通公園や分区園といった施設があることで有名です。2012年に兵庫県から尼崎市に移管されましたが、その際に必要性が低くなった交通公園を単に芝生化するのではなく、ワークショップを開催して、地域の皆さんの公園愛を継承する計画をつくりました。機能としてはいらなくなった交通公園部分も一部残し、地域の有志による交通教室の継続や、プレイパークやその他イベントがしやすい空間に再編しました（図4）。今でも地域の方々から、交通公園の愛称で親しまれ、ご近所の



図2 だんだん畑での収穫祭の様子  
全814戸に配れるよう栽培されたが、採れすぎて当日蒸して食べることに。

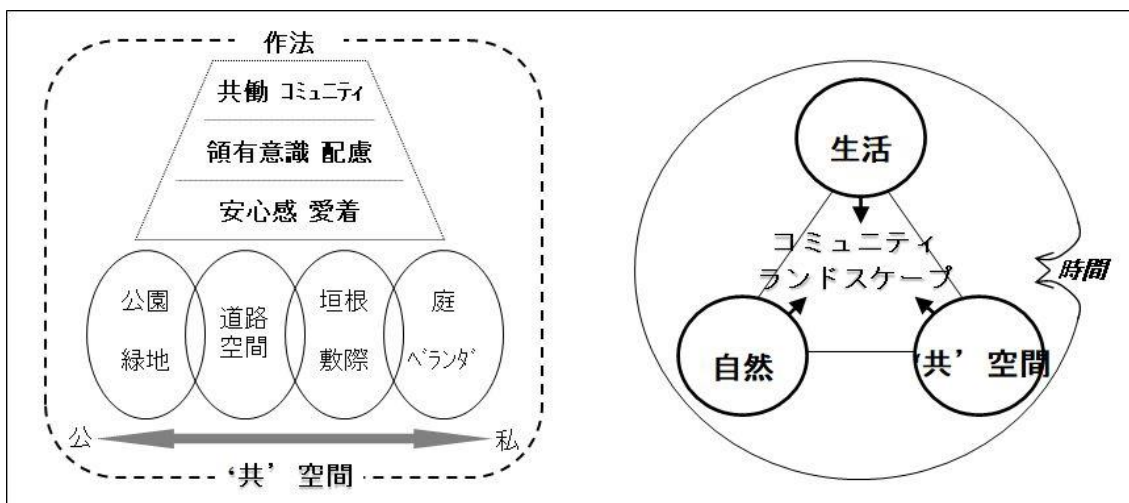


図3 “共空間”とコミュニティ・ランドスケープの概念

保育園の運動会などにも使われています。公園のリノベーションの先駆けとなる事例です。

この公園に関わるきっかけを作っていた、関西学院大学の角野幸博教授（当時、武庫川女子大学教授）に、本の企画で「パブリック（公共）って何ですか」と質問しました。答えは「誰のものでもない場所を、誰かの場所にする事」でした。日本の公園は「みんなの場所だから、あなたの場所ではない」と考えられることも多く、みんなの内1人が反対するだけでボール遊び禁止、会話禁止、自転車禁止などどんどん使いにくい場所になっています。本来はなにか問題が起こっても、互いの配慮によって使い方を工夫したり、禁止ルールではなく使い方マナーを決めたりするべきでしょう。このような取り組みが進むよう、各地で緑の基本計画の策定支援をしたり、ソフトも含めた公園づくりのワークショップ支援を続けています。



図4 交通公園の南半分が芝生化され、周りの樹林広場と一体化した西武庫公園の再整備計画  
柴田ほか（2015）より引用。

### 苦情で生まれるパツンパツンの街路樹

最近では、街路樹で問題が多く起こっています。この文を読まれている皆さんも、パツンパツンに刈り込まれた、棒のような街路樹を見かけたことがあると思います（図5）。あれは、3年に1度で済ませるため大きく剪定する、狭い空間に大きくなる樹を植えてしまっているなどの理由もありますが、最も多い理由は地域住民からの「掃除が大変なので、葉が落ちる前に枝ごと切って」という苦情です。問題を最も簡単で直接的な方法（枝ごと葉を無くす）で解決しようとして、地域の価値を損なっている例です。行政職員も切りたくて切っている訳ではなく、よく解決方法を相談されるので、まずは実態を研究で明らかにしました（図6）。



図5 パツンパツンに剪定された街路樹  
ここまで切られると、樹形は元に戻らない。

苦情もデータとして蓄積し分析すれば、解決の方向性や、一緒に解決するパートナーはわかります。パツンパツンにして欲しくない人は、多くいるけど声はあげないだけです。例えば自治会やまちづくり協議会で話し合い、みんなで落葉を掃除したり、適切に剪定したりすると、街路樹だけでなくコミュニティも育成されます。このような協働型の街路樹管理が、全国で見られ始めています。

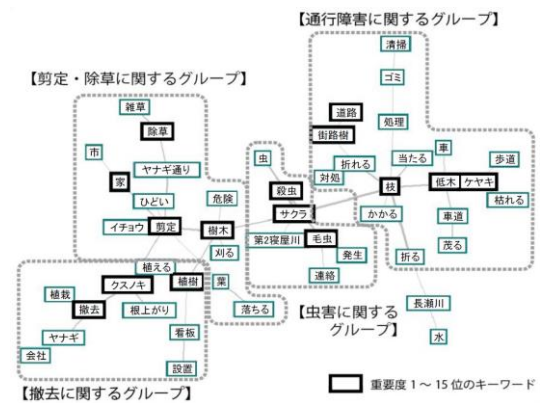


図6 視覚化され、問題の全体が把握できるようになった街路樹への苦情

## 緑の効果と機能

自然・環境と大きく捉えられがちな緑ですが、様々な効果と機能があります(図7)。まず、「存在効果」として景観形成、防災、環境調節、生物多様性などの機能があり、あるだけで多様な価値があります。加えて、「利用効果」として保健休養や生産機能があり、使うことで人の生活に近い価値を更に生み出します。これらの存在と利用を媒体することで、文化・交流、健康福祉、教育・学習、賑わい創出、コミュニティ形成、子育て支援、不動産価値など多様な機能が発揮され、地域の価値向上につながるのです。

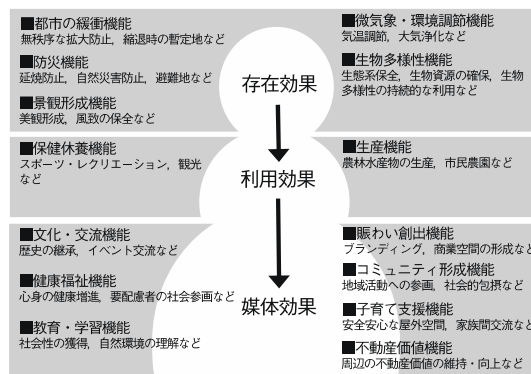


図7 緑の多様な効果と機能

地域には、子どもから大人まで、住民から事業者や企業までが一緒にいて、様々なコミュニティがあります。それぞれの気持ちやできることを持ち寄って、身近な緑を育むことで、コミュニティが強くなり、地域の価値も向上します。今回紹介した事例は、これまでは少し特別な事例でしたが、その効果が広く認識され、当たり前のように地域で取り込まれることを願っています。

## 参考文献

- 赤澤宏樹・増田昇・下村泰彦・山本聡（1998）住宅密集市街地における空間構造と空間認知の係わりに関する研究、ランドスケープ研究、61（5）、705-710.
- 赤澤宏樹・田原直樹（2002）住民による緑化の発生と集合住宅の空間特性との関係、環境情報科学論文集、No.16、217-222.
- 赤澤宏樹・中瀬勲（2000）南芦屋浜団地における緑化活動を通じたコミュニティ形成への支援に関する研究、63（5）、631-634.
- 柴田俊樹・村本次正・遠嶽明子・津田主税・赤澤宏樹（2015）西武庫公園の協議方式による再整備と継続的な活用、ランドスケープ研究増刊 技術報告集、8、128-133.
- 赤澤宏樹・奥川良介・加我宏之・忽那裕樹・小西弘朗・近藤秀樹・長濱伸貴・野口健一郎・野田奏栄・花村周寛・武藤克夫・山崎亮・山本聡（2006）『マゾヒスティック・ランドスケープ』（分担執筆）、学芸出版社、pp256.
- 赤澤宏樹・川口将武・藤本真里・上田萌子・大平和弘・田原直樹（2015）東大阪市におけるテキストマイニングを利用した街路樹管理への市民要望の把握、ランドスケープ研究、78(5)、741-744.
- 赤澤宏樹（2021）公園緑地計画。造園学概論、朝倉書店、60-79.